

# A Report on the Contemporary Europe(2) : from my Research in March 2005

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9973">http://hdl.handle.net/2297/9973</a>

# ヨーロッパ・レポート2005. 3(2)

## 上 条 勇

### I はじめに

### II 懐かしのウィーン

- (1) ウィーンに降り立つ
- (2) ハイダーの落日
- (3) ウィーンでの活動そして旅立ち —— AK図書館

### III ドイツ・レポート

- (1) ベルリンにて
- (2) フランクフルトへ
- (3) ケルンにて —— ケルン大学付属図書館
- (4) 「ドイツの苦悩」 —— 連邦大統領基本演説
- (5) ケルン大聖堂前の広場にて —— クルド人の悲劇
- (6) ホテルでのケニア人との会話
- (7) 「ドイツの苦悩」ふたたび (以上, 前号)

### IV EUとブリュッセル (以下, 本号)

- (1) ブリュッセルへ
- (2) 移民問題について
- (3) 欧州委員会移民セクター責任者との会見

### V 帰 国

- (1) ウィーンへ
- (2) 機内にて

<承前>

### IV EUとブリュッセル

#### (1) ブリュッセルへ

3月19日, わたしは午前9時46分発のIC(ドイツの特急)に乗る。最初

はケルンで乗り継いでブリュッセルに行くつもりであった。しかし、座席においてあった時刻表を見ると、オスナブルクで乗り換えてのアムステルダム行き ICの方が接続がよかった。アムステルダムに一泊するのもよいと思った。というわけで、オスナブルクで、11時50分発のアムステルダム行きの ICに乗り換える。しかし、これが間違いのもとだった。オランダに入っただけですぐに耳を疑うアナウンスがあった。この列車は、ヘンゲロ (Hengelo) という町止まりだという。

このヘンゲロという町で、乗客はみなゾロゾロと降り立った。わたしは、降り立ったホームにあった時刻表で、次の列車が到着するホームを確認した。同じホームの a と b というラインにわずかな時間差で行き先の違う二本の列車が入ってくる。アムステルダム行きは、a のラインようだ。2つの列車が次々に入ってきた。これらの列車は外見からして快速であり、特急ではないように見えた。話が違ふと、わたしがふたたび時刻表を見つめると、「May I help you」と青年が話しかけてきた。渡りに船と、アムステルダム行きを青年に告げた。青年は、自分が教えてあげるから任せておけと言う。そして、b のラインの列車だという。発車の時刻が近づき、迷う暇もなく、わたしたちは、この列車にかけこんだ。なかをのぞくと、客席は満席状態である。デッキの補助椅子にすわり、わたしが不安そうな顔をしていると、青年は、自分が面倒みるから安心せよと言う。

次の駅で乗客が降り、席がひとつ空いたので、わたしのみがなかに入った(結局先の青年とはここで別れた)。すると、空いた席の横にすわっていた青年が立ち上がり、わたしの荷物を持ち上げ、荷物棚に置いてくれた。年寄り扱いされたかなと思いつつも礼を言い、席にすわる。聞いてみると、自分はオランダの大学生だと言う。私の向かいに座っているドイツ娘が積極的にこの若者にドイツ語で話しかける。大学問題について話しているので、わたしも興味深く耳をかたむけた。およそ6年で大学を卒業すること、就職難、授業料のことなどが話し合われていた。そのうち車掌が改札に来たので、この列車がアムステルダム行きかどうかを聞いた。車掌は、首を横に振り、アムステルダムに行くためには2回乗り換えないといけないと言う。わたしは、やっかいなことになったと思った。

列車は、ツヴォレ (Zwolle) という町で終点となった。どうも見当違いのところに来てしまったようだ。ホームのインフォメーションで訊くと、すぐ向かい側のホームにロッテルダム行きの列車がきており、アムステルダムに行くには途中ユトレヒトで乗り換えなければならないと言う。わたしは、この列車にあわてて飛び乗った。午後2時40分、列車はゆっくりとスタートした。わたしは、がらがらに空いている客車のなかで、今後のスケジュールを再考し、当初にたてた予定どおりブリュッセルに行くことにした。

ロッテルダム駅に降り立ったときには午後4時過ぎになっていた。駅を出てみると、目の前に高層ビル群がせまっていた。しばらく待った後、私は、ブリュッセル行きの列車に乗った。しかし特急と思って乗ったブリュッセル行きの列車は、どうしようもなく遅い。どうもローカル列車と間違えたようだ。わたしは、長い停車時間を待つたびに気が気でなくなっていった。ホテル探しのためには、夕方遅くなるのを避けなければならない。国境を越え、ベルギーに入るとすぐ、わたしはとうとうアントワープに不時着することにした。時刻は午後5時半をまわっていた。アントワープ駅は、古い歴史的な建物である。それを見物する余裕もなく、わたしは旅行書にしたがい、駅近くのホテルを探す。ホテルはすぐ見つかり、受付には太った黒人の男が立っていた。英語で一泊の値段を聞くと90ユーロとのことだった。わたしは、仕方がなしにここに泊まることにした。ダブルルームの広い部屋で、ベッドに横たわり、わたしは、リモコンで、天井から吊り下がっているテレビのスイッチをつける。ほとんどフランス語とオランダ語の番組しか映さないテレビを見ながら、わたしは、今日は、失敗の一日であったと落ち込んだ。

アントワープにはとくに用事がない。3月20日、朝に駅前通の繁華街を軽く散歩した後に、わたしは、午前10時24分発の汽車で、ブリュッセルに向かった。汽車は1時間ほどでブリュッセル中央駅に着いた。旅行書を調べ、ツーリスト・インフォメーションを探しに、坂を下り、旧市街の中心部に向かう。ブリュッセルは、結構坂の多い街だと思った。85%がフランス語人口で、残りがオランダ語人口である。ドイツ語はほとんど通用しない。わたしは、苦手な英語でやりとりをせざるをえなかった。人に道を訊きながら歩き、旧市街の中心部でやっとツーリスト・インフォメーションを見つけることができ

た。そして、どうにか3泊のホテルの予約ができた。一泊50ユーロと格安である。窓口の職員に、歩いて遠い距離ではないと言われ、歩いていくことにした。しかし道は結構遠かった。重い荷物をひきずり、えんえん石畳の坂を上っていく。さきほどの中央駅の前を通り過ぎゆく。あらためて駅を見ると、ホームと線路は地下にもぐっており、建物もそれほど大きくない。要するに駅らしくないのだ。駅横の坂を上り、目印として指定された広大なブリュッセル公園を目にして、やっと一息をついた。それからまっすぐメインストリートを歩き、まずホテル・プレジデントを目にする。りっぱな名前の小さなホテルを見て、思わず笑ってしまった。道を右に折れ、100mほど行くと、ホテル・ kongress があった。これがわたしの宿泊するホテルである。受付に立っていた青年に、英語で念のためにドイツ語を話せるかと訊いてみた。「いいえ、フランス語と英語だけです、サー」という答えがかえってきた。部屋のテレビは、衛星放送付であった。試しにチャンネルをまわしてみた。ZDFのドイツ語放送が流れてきて、ほっとした。荷物を部屋に置いた後、わたしは、中央駅にもどった。24時間有効のチケットというのにひかれて、そこからブリュッセル市内観光のバスに乗った(わたしは、結局、観光バスに二度乗った)。

ホテルにもどると、受付には、先ほどとは違う、少し年輩の係が立っていた。部屋の番号の記憶が少しあいまいだったので、わたしは、「maybe (おそらく、ひょっとして)」と言って、部屋の番号を告げた。この「maybe」という言い回しがよほどおかしかったらしく、その後、彼は、わたしが部屋の鍵をもらおうとするたびに、「maybe」と笑って番号を確認する。

## (2) 移民問題について

ブリュッセルでのわたしの目的は、EUの欧州委員会の司法・自由・安全保障総局移民セクターの責任者M・シーファー氏と22日に会うことである。日本を出立する前に、わたしは、フランスが学校におけるスカーフ着用を禁止する措置をとり、これを拒絶する女生徒を隔離するといったこともやっていることを、テレビのニュース等とおして知っていた。また、朝日新聞の記事をおして、スペイン政府が非合法移民の合法化措置をとり、反対に、

これまで難民受け入れに寛大であったデンマークが、難民受け入れ制限措置をとったという事実を知っていた。ドイツ、オーストリアの大都市をまわってきて、わたしは、多くの民族が混ざり合って住むヨーロッパの現実をあらためて実感した。

9年前のウィーンでは、スーパーで買い物をする多くのスカーフをかぶった女性を目撃した。おそらく彼女らのかなりは、旧ユーゴスラヴィアからの難民であったのであろう。トルコ人と思われる人々も多かった。ウィーンは、まさしく国際都市であった。今回の旅行では、街角に黒人の姿がめだった。子供の手をひき、乳母車を押す黒人女性を何度も見かけた。先に述べたように、ケルンのホテルでは、ケニア人たちがたむろしていた。ハンブルクでは、トルコ人のレストランで食事していたとき、若い黒人の一団が入ってきた。そのひとりが、わたしの隣の席で食事をしていた若い白人の女性に、相席していかと訊いて断られていた。以前より黒人の数が増えているように見える。貧困と紛争の地域であるアフリカから合法・非合法の多くの移民・難民が流入してきているのであろうか？

移民問題について、3月17日付けの日刊紙『ヴェルト』における「ヨーロッパ人は移民に疲れている——EU市民の3分の2は、『多文化社会』がその限界にいたっていると見る——」というタイトルの記事は、興味深いものであった。

『ヴェルト』によれば、去年(2004年)11月、オランダの映画ディレクターのテオ・ヴァン・ゴッホ Theo Van Gogh の殺害(映画でムスリム女性を侮辱したという理由でイスラム過激派のモロッコ人青年に殺害される——筆者)後、ヨーロッパにおいて多文化社会の是非を問う声が高まった。ドイツでも極右諸政党が強まり、どれだけ寛容すればいいというのか、という議論に再び突き動かされた。人種主義・外国人排斥にたいする欧州連合のモニター機関(EUMC)は、このテーマに関する研究を発表した。ウィーンで提出されたこの研究の結果は、多文化社会構想にたいする批判が高まっていることを示している。

『ヴェルト』は、「『多文化』社会の拒絶」(多文化社会にも限界があると語る——筆者)を表すEU旧加盟15カ国の別棒グラフ(EUMC出所、ア

ンケート結果に基づき作成されたものだが、年次が示されていない、本文に基づき、2003年と推定される)を掲げている。それによると「多文化社会」を拒否するという回答のEU平均は70%である。ギリシア、ドイツ、アイルランドが80%を超え、ギリシアがもっとも高い。つづいて、ベルギー、オランダ、イギリス、ルクセンブルク、オーストリア、ポルトガル、フランスがEU平均を上まわっている。EU平均を下まわっているのは、デンマーク、スペイン、イタリア、スウェーデン、フィンランドで、フィンランドがもっとも低い。

『ヴェルト』の解説では、EU平均70%のうち20%が、「移民よ、再び去れ」という考えである。総計58%が、移民のエスニック集団行動を恐れ、さらに移民によって職を奪われる脅威、移民による犯罪増加の脅威を語っている。回答者のうち低所得、低学歴者において移民拒否の傾向が強い。また40-49歳の年齢グループより、30-39歳の年齢グループの方において、多文化社会拒否の傾向が高い。

『ヴェルト』は、EUMCが論拠として掲げる最新のアンケート結果が2003年であること、そして1997年いらいの反移民感情の上昇を語る上で、これと比較に足る過去の数字が挙げられていないというその研究の弱点も指摘している。

わたしは、『ヴェルト』のこの記事を最初に見たときは衝撃を受けた。しかし、よく考えてみると、『ヴェルト』も指摘しているとおおり、EUMCは、最近とくに反移民感情と多文化社会拒絶の考えが強まったという事実の論拠をここでは示していない。多文化社会拒否がEU平均で70%という数字は、かなり高いのであるが、そのうち明確な移民拒否は20%である。残りは、多かれ少なかれ多文化社会にも限度があるという考えからなる。EU市民の多くは多文化社会そのものを否定しているわけではないと思われる。

これまでのEUにおける多文化主義(教育)は、民族的少数者(と移民)問題への取り組みの先進的な例をなす。しかし、それは、多文化主義を限りなく称揚するものではなく、「社会への民族的少数者(移民)の統合」という観点の枠組みのなかでのことであった。そこには多文化主義こそが、民族的少数者(移民)の社会的統合の確かな道であるという確信が見られる。多

文化主義と民族的少数者の社会的統合の両立は、なかなか困難な課題である。国によっても両者への力点の置き方によって、政策的相違が生ずる。たとえば、多文化主義教育に力を入れてきたオランダから統合に力点を置くフランスなどに分かれる\*。多文化主義教育で浮かびあがって来ている問題点としては、①多文化主義の称揚がかえって社会の分断と亀裂を促進するようなことにはならないかどうか、②社会の多数者の言語・文化の習得の妨げになり、移民の二世、三世の若者たちを就職上不利な地位に追い込まないかどうか、ということなどがあげられる。『ヴェルト』の記事は、EU諸国の「多文化主義政策」が成功とはほど遠い状況にあるという事実、また、相次ぐテロに直面して移民をめぐるEU諸国民の感情が悪化しているという現実の一端を示している。

興味深いことに、上の『ヴェルト』の記事のすぐ横に「EUは、家族奨励と移民によって高齢化と戦うつもりである」というタイトルの記事が載っている。欧州委員会は、少子高齢化によって、2030年までにおよそ2000万人の追加被雇用者が必要であり、また80歳以上の高齢者が現在の1880万人から3470万人に増加すると述べている。こうしてEUは、その『グリーンブック』で、家族奨励と追加移民労働者の導入の必要性を唱えるのである。EUは、これまで移民発生を根絶つために移民供出国と協力はかり、新たな移民の受け入れを制限する加盟諸国の意向をくむ姿勢を示す一方で、EU市民権のもとでの第三国国民（域外国籍をもつ住民）の待遇改善に努めてきた。しかし、上記の記事によると、欧州委員会は、少子高齢化に対処するために、追加移民労働者の導入に積極的な姿勢を示すにいたっている。最近スペインは、

---

\* 今年（2005年）11月、警官の職務質問に逃げたイスラム系移民の少年2人が変電所で感電死したのをきっかけにフランスで移民の若者たちによる暴動が続いている。サルコジ内相の「社会のくず」発言が暴動の火に油を注ぎ、暴動がパリから全土に広がっている。血統主義に長く立ち移民の国籍取得が困難であったドイツに較べて、フランスでは、「自由・平等・博愛」の理念を共有する者は、移民であっても国民として認められてきた。しかし、他方では、理念に基づき、個人の契約から成り立つ「政治的共同体」としての国民のこうした考えは、正教分離の国家原則とともに、多文化主義の許容の点では、フランスに制約を課してきた。社会的に現実に存在する移民にたいする差別、高失業、低学歴、貧困に悩む移民の青年たちの長年の不満が暴動の形で爆発したと言える。



非合法移民の合法化措置をとり、移民の積極的な受け入れ政策をとった。が、これは EU 諸国のなかでは例外的な動きであろう。多くの国では、これ以上の移民受け入れには消極的であり、また移民に反感をもつ住民感情もある。移民・難民流入規制強化の動きさえみられる。そのなかで、上記の欧州委員会による移民労働者受け入れの積極的姿勢は、いかなる意味をもつのだろうか。

### (3) 欧州委員会移民セクター責任者との会見

3月22日朝9時半にホテルを出る。これまでとは違った道、古い歴史的な趣きのある路地裏をたどって目印のブリュッセル公園に着く。公園の中の遊歩道を歩く。朝の空気がすがすがしい。あらかじめ地図で調べていた経路に従い、公園を出て、シューマン広場に向かってテクテクと歩いていく。かなり歩いた末、大きな欧州委員会の建物が見えてきた。空からみると、3本の矢が合わさったような独特の欧州委員会の建物は、全体が工事中であった。そのため欧州委員会は、EUの一面に分散して存在するようである。シューマン広場にある欧州委員会広報で、パンフレットを集めた後、近くのレストランで食事をする。その後、EUショップでEUの旗を買い、少し離れた場所にあるガラス張りのユニークな欧州議会の建物を見学する。

このように時間つぶしをして、午後2時半、ルクセンブルク通り (Rue Luxemboug 46) にある欧州委員会司法・自由・安全保障総局に向かった。この総局の建物は、何の変哲もなく、あるはずのEUの旗も掲げていない。建物の番号を確認し、入り口のプレート表示を見て、ようやくここだとわかった。しかし建物なかに入ると警戒は厳重であった。警備員がすぐに来て、こちらの用件を問う。M・シーファー氏と予約があると告げると、受付にわたしを連れて行った。受付では、確認の電話をいれている。確認がとれ、わたしは、自己の名前等を記帳する。これが終わって、わたしは、空港の手荷物検査に似たやり方でX線検査を受ける。ゲートを2、3度くぐったが、ピーと警報がなる。時計をはずし、めぼしい金属類をポケットから出して、ようやく通る。相当敏感な装置だ。約束の時間より少し早かったので、シーファー氏は今部屋にいないとのことだった。わたしは、玄関のソファーで待たされ

た。手続きが終わったということで、警備員たちはリラックスして、仲間うちで、ハンド金属探知機でたわむれはじめる。女性警備員のボディをチェックし、ピーピーと鳴らす。ネクタイピンでも鳴るのだぞと言って、わたしに笑いかける。わたしも、緊張が解けた。

そのうち、秘書の女性が笑顔でわたしを迎えにきた。どこをどう通ったかよく覚えていないが、廊下でシーファー氏が出迎えてくれ、互いに握手を交わした。われわれは、小会議用に使っていると思われる少し殺風景な部屋で、会見をはじめた。わたしの希望でドイツ語での会見である。わたしは、ICレコーダーを取り出し、シーファー氏に録音の許可をとった。

まずわたしは、前掲の『ヴェルト』の記事を示し、ヨーロッパ人が移民に疲れているというこの記事をどう思いますかと訊いた。シーファー氏は、こう答える。

これまでEUすなわち欧州委員会、欧州議会、理事会は、共通の移民政策を追求してきた。これはEUの政治的プロセスである。しかし、実際には、加盟諸国において非合法移民の流入、不法就労、失業といった困難な問題がある。そのなかで移民に対する差別が生ずる一方で、移民たちがゲットーに集住する傾向がある。その結果、移民たちのヨーロッパ社会への統合が妨げられ、住民の反移民感情が生じている。この記事は、こうした現実の反映なのであり、驚くべきアンケート結果を示している、と。

わたしは、移民問題では、宗教の相違、生活慣習の相違などが大きな壁となっているのではないかと述べ、学校におけるスカーフ問題についてどう思うか訊いてみた。シーファー氏は、これはEUが関知することではなく、加盟各国の用件をなしていることを強調した上で、次のように述べている。

これは、イスラム教徒の特殊問題である。スカーフは、信仰のシンボルとなっている。しかし、たとえばフランスでは、政教分離の国家原則、宗教と学校教育を分離する価値観から、公共の建物、学校におけるスカーフ着用を禁止している。これは、加盟諸国における移民の「社会的統合」の問題である。確かに一方に個人の基本権をなす信仰の自由があるが、公共の場では、すべての宗教は平等に取り扱われなければならない。たとえば、ユダヤ人は、かぶり物を着用しない。とはいうものの、スカーフ着用の禁止は、宗教・思

想信条の個人的自由とある程度矛盾・対立するのも事実である。しかし、委員会は、その是非について自己の答えをもたない。というのは、それはあくまでも加盟諸国の用件であり、加盟諸国における移民の社会的統合（移民は統合されなければならない）の問題だからである。

シーファー氏は、結局、スカーフ問題が委員会の答えるべき問題ではないと用心深くことわりながらも、この問題が一筋縄でいかないことも示したと言える。わたしは、過去にスカーフ事件が生じ、最近これが再燃している事実と、トルコのEU加盟交渉と関連しているかと質問した。シーファー氏は、トルコの加盟交渉は政治決定であり、政治的プロセスである、スカーフ問題とは関係ないと明快に答えた。氏は、こう述べる。トルコはNATOの一員であるし、少数民族の取り扱いの点でも近年改善がみられた。しかし、個人的な見解では、トルコのEU加盟は困難であり、長い交渉となろう、と。

シーファー氏は、政治的決定としてのトルコのEU加盟交渉とスカーフ問題を区別する。しかし、本当にそう明確に区別できるのであるか？トルコの加盟は、「キリスト教のヨーロッパ」への人口の多いイスラム教国（人口約6800万人）の初めての加盟を意味する。EU加盟諸国における少子高齢化の状況下で、EU内のイスラム人口の圧倒的増大を危惧し反発する声も強い（Baha Güngör, *Die Angst der Deutschen vor den Türken und ihrem Beitritt zur EU*, Kreuzlingen/München 2004, S.19以下を参照）。ということで、トルコのEU加盟への反対の声は住民のあいだでは強く、反対のデモさえも生じている。また、最近のテロに関連して、イスラム教徒の移民にたいするEU諸国の住民の反発も強まっている。EU諸国は、信仰の自由を建前としつつも、「ヨーロッパにおけるイスラム」の問題に悩んでいるように見える。スカーフ問題の再燃は、ヨーロッパのこうした雰囲気なかで生じたのであり、トルコの加盟問題もこれと明確に切り離すことはできないのではなかろうか？

わたしは、続いてドイツにおける新国籍法（2000年施行、ドイツで生まれた移民の子供に国籍を与えるといった出生地主義の立場への転換を意味し、成人に達するまで彼らに二重国籍を認めるなどを内容とする）の意義についてシーファー氏に問うた。シーファー氏は、これはドイツの問題であり、これについて委員会が話すべきことはあまり多くないと述べる。氏によれば、

国籍取得は、最終点 (Schlußpunkt) であり、国へのローヤリティを必要とする。二重国籍は、原則として認められない。わたしが、ドイツで生まれる移民の子供には二重国籍が認められるのではないかと言うと、これは、例外的措置であり、彼らが成人に達するまでのことであるという答えが返ってきた。わたしは、日本では、多くの在日朝鮮人が住み、差別的待遇を受けているので、日本人の目からすると、ドイツにおける新国籍法は注目に値すると述べておいた。

わたしは、本当は、欧州市民権の導入にともなう第三国国民 (外国籍をもつ住民) の差別解消に向けた EU の努力との関連、統合の結果としての国籍取得から統合のプロセスとしての国籍取得への立場の転換、新国籍法の導入による移民の境遇の変化の現状などについて訊きたかったのだが、語学能力上の限界から、この点、あまり深く追及できなかった。

わたしは、最後に、新規加盟10カ国からの移民労働者の流入にたいする過渡的制限措置 (最長7年間) について訊いてみた。シーファー氏は、新規加盟国における国境管理体制が完備されていない以上、これは避けがたい措置であったと答える。EU では、「シェンゲン領域」が実現されており、その中では、パスポートの提示なくして人々は移動できる。それだけに域外にたいする国境管理が重要なのだと言う。

およそ1時間あまりの会見であった。わたしの語学能力上の制約から、あまり立ち入ったことが聞けなかったのがいささか残念であったが、まずまずの成果であったと思う。玄関までシーファー氏に送られ、建物を出ると、少し雨が降っていた。急ぎシューマン広場までもどり、近くのレストランに入った。ビールを片手に、窓からぼんやりとシューマン広場を眺めた。これで、今回のヨーロッパ研究調査旅行のすべてのスケジュールが終わった。

## V 帰 国

### (1) ウィーンへ

3月23日、午前4時半に目が覚める。シャワーを浴びた後、荷物の整理をする。朝食時、テーブルにつこうとしたとき、黒人の若い女性にホテルのボー

イに間違えられた。「コーヒー頼むわね」と言われたのである。我が身を見れば、白いワイシャツに黒いチョッキの姿である。ボーイに間違えられても無理はないかと、少し苦笑いをした。

朝食を終え、部屋にもどって一服する。窓から外を眺めると、中庭には見知らぬ鳥が鳴いていた。晴れた空には、一筋の飛行機雲が流れていた。午前8時ごろ、わたしは、部屋を一度見まわした後、旅だった。

午前8時半、わたしは、ブリュッセル中央駅の古い、くすんだ感じの地下ホームに立っていた。駅は小さく、1番から4番ホームまでしかない。非常に過密ダイヤで、数分置きに列車がせわしく発着する。わたしは、8時50分のブリュッセル空港行きエアポート・エクスプレスに乗った。10時50分発のウィーン行きオーストリア航空の飛行機に搭乗し、その日の昼にウィーンに着く予定だ。ブリュッセル空港では、黒い皮のロングコートを着、かかとの高い靴をはき、装飾をいっぱい身につけた男など、少しパンクがかった日本の若い男女3人がわたしと同じ飛行機を待っていた。わたしは彼らとかかわらないように少し距離をとった。

ウィーンでは、日本から着いたときと同じホテルをあらかじめ予約していた。ホテルの受付に、85ユーロの料金を良質の部屋を提供すると書いてある予約書を提出した。そうしたら受付の女性は、少し慌てた様子で、随分長くパソコンで部屋を調べていた。こうして提供された部屋は、シングルでシャワーだけで風呂もなく、着たときよりも質がかなり劣るようだ。ウィーンでは、ケルントナー通りで買い物をしたり、シュヴェーデンプラッツのベンチに腰掛け、群がる鳩にえさをやり、道行く人をぼんやりと眺めたりして、少しのんびりとした。

翌24日、わたしは、シュベッヒャート空港から、13時35分発の飛行機で成田空港に向かって飛び立った。

## (2) 機内にて

わたしは、今、成田空港行きの飛行機の機内にいる。12時間ほどの旅だが、時差の関係で、成田に着くのは翌朝となる。隣の席には、わたしとほぼ同年代のビジネスマン風の日本人がすわっている。訊いてみると、ウクライナか

らの帰りであり、ウクライナへは商用で行ったとのことである。この話を聞いて、わたしは、9年前に、西ウクライナのリヴィウ（ドイツ名レンベルク）に訪問したときのことを思い出した。

わたしは、ウィーンで知り合ったウクライナの友人の誘いを受け、彼の大学の建築学部長の招待状を手にして、ウィーンのウクライナ大使館に行った。ビザの発行を求める行列の後ろについて待つことしばし、ようやくわたしは窓口に立って、パスポートと書類を差し出した。カーキー色の制服を着た係官が、パスポートを開き、わたしの顔をジロッと見た後、書類をチェックし始める。係官は、すぐに「上司の許可証がないではないか」と書類不備を指摘する。わたしは、はたと困った。上司と言ったって、日本にいるではないか。わたしがこのことを指摘し、今から上司の許可証を得るのには不可能に近いと説明した。係官は、がんとして許可証がなければ駄目だと言う。わたしも粘る。すったもんだのあげく、わたしが粘り勝った。わたしは、それからの冒険の旅を思い出す。ウィーンの南駅から、リヴィウ行きの汽車に乗った。列車の一番後ろの古びた客車だけがリヴィウ行きで、スロヴァキアのブラチスラヴァで切り離され、他の列車に連結される。ブラチスラヴァでは、かなり待ち時間があったので、わたしは、ウクライナ人ジャーナリストのひとりと、街に出かけ、パブでビールを飲んだ。駅にもどって、びっくりした。ホームに汽車がないのだ。慌てて周囲を見まわすと、向こう側のホームに、わたしたちの客車だけぽつんと寂しそうにあった。それから、わたしは、いくつもの国境を越えてようやくリヴィウにたどり着く。駅の構内に出たとき、迎えはまだ来てなかった。構内にごった返す人々の群れを眺め、キリル文字の表示を見つめて、わたしは途方に暮れた。駅の入り口で、しばし待つこと20分、友人家族がようやく車で迎えに来た。われわれは、彼のアパートに向かった。市の中心街を抜けると真っ暗になった。街灯もついていない。友人は、電力不足で、電力供給の時間制限をしていると説明した。手探りでアパートの真っ暗な階段を登り、彼の住まいにたどり着いた。テーブルに腰掛け、ロウソクの灯りを頼りに、われわれは、電気の通るのを待った。翌日、わたしは、思いがけない経験をした。友人とリヴィウ市長にあいさつにいった時のことである。どういうわけか、わたしは、会議室に連れて行かれ、カナダからの使節団との交渉のテーブルについた。わたしは、使節団長と握手し、リヴィウ側の席にすわった。リヴィウ側は、都市計画におけるその資本不足を述べ、カナダからの積極的な融資を訴えていた。

わたしは、昔のウクライナでの経験を思い浮かべつつ、彼に今のウクライナについて訊いてみた。彼は、こう答える。ウクライナに今行くことは、そう難しいことではない。キエフに行ってきたが、多くの日本人がビジネスの説明会に出席していた。ウクライナにはビジネス・チャンスがある、と。

わたしは、彼の話に、日本のビジネスマンの商魂のたくましさを見いだした。わたしは、かつてリヴィウ市長が別れ際わたしに日本からの投資を訴え

ていたことを思い出した。わたしに訴えられても困るのだが、藁にもすがる気持ちであったのかも知れない。ガリチア地方がかつてハプスブルク帝国に属していたこともあって、西ウクライナは、西側文化の影響を強く受けてきた。リヴィウもかつてハプスブルク帝国のガリチア地方の中心都市をなし、古くて優雅なその街並みは、小ウィーンを思わせた。街の中心部に立派なオペラハウスもあり、わたしはそこで友人家族とオペラを観劇したのであった。友人は、国家的独立後、キエフを中心とする東ウクライナにたいしてリヴィウを中心とする西ウクライナは冷遇を受けていると述べていた。今年1月、西ウクライナの支持を得たユーシチェンコがウクライナの新大統領になった。ユーシチェンコは、ウクライナのEU加盟の希望を表明しており、ウクライナの西側指向が強まるに違いない。わたしは、長く会ってはず、すでに音信も途絶えたウクライナの友人家族はどうしているだろうかと思いはかった。

日本のビジネスマンは、疲れたのか、わたしとの会話を止め、目を閉じた。わたしは、スチュワーデスに白ワインを注文した。そして、今回の調査旅行の余韻をかみしつつ、ワインのアルコールに身を委ね、日本と世界についてとりとめのない思索にふけた。

(完)